

スキーマの個別性がリアリティモニタリングに  
及ぼす影響  
－質問紙を用いた検討－

田中 晶子

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号

2005年9月

(抜刷)

# スキーマの個別性がリアリティモニタリングに及ぼす影響 —質問紙を用いた検討—

田 中 晶 子

(平成17年3月31日 提出)

記憶された情報源が外的か内的かを判断するプロセスは、リアリティモニタリングと呼ばれている (Johnson & Raye, 1981)。リアリティモニタリングは、実験的なアプローチや質問紙を用いたアプローチなど様々な方法で検証がなされている (Johnson, 1988)。これらリアリティモニタリングに関する研究は、外的記憶と内的記憶が持つ質的特徴の違いに焦点が当てられてきた。しかし、同じ内的記憶に属する場合でも、推測や想像のもととなる知識 (スキーマ) によって持ち得る質的特徴が異なる可能性が示されている (田中, 2004; 田中・広瀬・高岡, 2005)。本研究は、先行研究において示された個別性の高いスキーマと個別性の低いスキーマに基づく内的記憶が持つ質的特徴の違いについて、記憶の持つ質的特徴を評定する質問紙 (Memory Characteristic Questionnaire: MCQ) を用いて検証を試みた。その結果、個別性の高いスキーマに基づく内的記憶は、外的記憶が豊富に持つとされる質的特徴を豊富に持つ可能性があることが示唆された。これらの結果は、Johnson & Raye (1981)の枠組みにおいて考察された。

キーワード：スキーマ、リアリティモニタリング、虚再認、質問紙

## 問題

私たちはしばしば、実際に経験した事柄の記憶なのか、それとも頭の中で想像した事柄の記憶なのか混乱を生じる。例えば、出かける前に鍵を実際にかけたのか、それとも鍵をかけようと考えただけであったのか判断がつかないという経験があるだろう。このような記憶の情報源に関する判断過程は、リアリティモニタリング (reality monitoring) と呼ばれている。

リアリティモニタリングとは、ソースモニタリング (source monitoring) と呼ばれる判断過程の一種である。ソースモニタリングとは、情報の起源についての記憶 (ソースメモリ) を弁別し、判断する認知プロセスをさす (Johnson, Hashtroudi,

& Lindsay, 1993; 金城, 2001)。ソースモニタリングは、対象とする記憶が内的に得られたもの (内的記憶) か、外的に得られたもの (外的記憶) かによって、リアリティモニタリングと外的ソースモニタリングの2種類に分けられる (金城, 2001)<sup>1</sup>。ソースモニタリングにおける外的に得られた記憶とは、実際に遂行された行為、現実に知覚された

1 Johnson, Hashtroudi, & Lindsay (1993) は、記憶の情報源が外的なものなのかそれとも内的なものなのかによってソースモニタリングを三つのタイプに分けているが、ここでは金城 (2001) に従い、ソースモニタリングをリアリティモニタリングと外的ソースモニタリングの二つの種類に分ける分類法を採用した。

事物についての記憶をさし、内的に得られた記憶とは、頭の中で想像、あるいは推測された事柄についての記憶をさす (Johnson & Raye, 1981)。そして外的ソースモニタリングとは、外的記憶の起源を判断するプロセスをさす (金城, 2001)。たとえば、Aさんから聞いた事柄 (外的記憶) なのかBさんから聞いた事柄 (外的記憶) なのかという判断プロセスは外的ソースモニタリングに含まれる。あるいは、自分が見た事柄 (外的記憶) なのか、新聞やテレビなどで聞いた事柄 (外的記憶) なのかという判断プロセスも外的ソースモニタリングに含まれるであろう。これに対し、記憶された情報源が外的か内的かを判断するプロセスはリアリティモニタリングと呼ばれている (Johnson & Raye, 1981)。例えば、実際に自分が見た事柄 (外的記憶) なのか、それとも想像した事柄 (内的記憶) なのかという判断プロセスがこれにあたる。

リアリティモニタリングの混乱は一種の記憶エラーであるが、日常生活では頻繁に生じており、重大な問題につながることは少ない。しかし、このリアリティモニタリングの失敗が深刻な問題につながる場面がある。たとえば、事故や犯罪場面での目撃証言があげられる。目撃証言では、目撃者自身の推測や解釈という内的な記憶と、実際に目撃した出来事という外的な記憶は明確に区別されなければならない。この区別を誤ると、解決を妨げたり、冤罪の原因となる場合もある。つまり目撃者は正確なリアリティモニタリングが常に求められていると言える。したがって、目撃証言研究の領域からは、リアリティモニタリングのプロセスについて詳細な検討が期待されている。

リアリティモニタリングのプロセスは、Johnson & Raye (1981)により提案された枠組みによって説明される。この枠組みによると、まず出来事が経験された時、その出来事の様々な質的特徴が貯

えられると考えられている。その質的特徴には、知覚的詳細や認知操作、文脈、時間的・空間的・情緒的詳細などが含まれる。外的記憶の場合は、感覚・知覚情報や文脈情報が豊富である反面、認知操作についての情報が乏しいのに対し、内的記憶は、認知操作についての情報は豊富であるが、感覚・知覚情報や文脈情報が乏しいとされている。そして、それぞれの記憶が持つこれらの質的特徴の違いが情報源を判断する時に用いられるのである。したがって、リアリティモニタリングのプロセスは記憶の質的特徴を詳しく評価することにより行われ、情報源の混乱から生じる誤りを抑制すると考えられるのである。

このJohnson & Raye (1981)による枠組みは、様々な方法によって検証がなされている。Johnson, Raye, Wang, & Taylor (1979)は、イメージを上手く作れる人は鮮明で詳細なイメージを作るため、外的に作られた記憶と質的に区別し難く、リアリティモニタリングが不正確になることを示した。Johnson & Raye (1981)の枠組みでは、内的に得られた記憶が詳細で鮮明な知覚的特徴を持つ場合、リアリティモニタリングが困難になると予想される。したがって、この結果は、彼女らの枠組みを支持するものであると考えられる。また、認知操作の量を操作した研究においても、枠組みと整合的な結果が示されている (Johnson, Raye, Wang, & Foley, 1981)。これらは、実験的なアプローチによってJohnson & Raye (1981)による枠組みを検証していると言えるだろう。

もう一つのアプローチとして、Johnson (1988)が実験現象学的アプローチ (Experimental phenomenological approach) と名づけたものがある。これは、それぞれの記憶について、感覚・知覚情報や文脈情報、時間的・空間的・情緒的詳細や認知操作を評定する質問紙を用いて検討する方法である。これら記憶の質的特徴を評定する質問紙は、

Memory Characteristic Questionnaire（以下、MCQと記述する）と呼ばれている。MCQを用いることによって、外的記憶と内的記憶についてそれぞれの記憶の持つ質的特徴の評定を比較することができる。このアプローチが用いられた研究として、Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988)があげられる。彼女らによると、外的記憶は知覚的情報や文脈情報の評定値が、内的記憶の評定値よりも高く、Johnson & Raye (1981)の枠組みと整合的な結果であった。このように、Johnson & Raye (1981)の枠組みは、実験的アプローチと質問紙を用いた実験現象学的アプローチの両面から支持されている。

ところで、これまでのリアリティモニタリングに関する研究は、外的記憶と内的記憶が持つ質的特徴の違いに焦点が当てられてきた。しかし、同じ内的記憶に属する場合でも、推測や想像のもととなる知識（スキーマ）によって持ち得る質的特徴が異なる可能性が示されている。田中・広瀬・高岡（2005）は、個別性の異なる2種類のスキーマを想定した。つまり、より広い事物にあてはまり、より多くの人に共有されている知識構造を個別性の低いスキーマとし、より個々の事物にあてはまり、比較的限られた集団、あるいは個人が有する固有の知識構造を個別性の高いスキーマとしたのである。そして、個別性の低いスキーマに基づく虚再生と、個別性の高いスキーマに基づく虚再生について検討したところ、個別性の高いスキーマに基づく虚再生はリアリティモニタリングが困難であることが示された。虚再生は、提示されていない事柄（内的記憶）を、誤って実際に提示された（外的記憶）と判断してしまうことから、リアリティモニタリングの失敗であると言える。つまり、個別性の高いスキーマに基づく内的記憶は実際に見た外的記憶であると誤って再生されやすいことが示唆されたのである。

この結果は、内的記憶が詳細で鮮明な知覚的特徴を持つ場合、リアリティモニタリングが困難になるとするJohnson & Raye (1981)の枠組みを支持するものであると考えられる。なぜなら、個別性の高いスキーマは個別性の低いスキーマより具体的であるため、そこからもたらされる内的記憶の知覚的特徴は詳細で鮮明であると思われるからである。したがって、個別性の高いスキーマと結びつく内的記憶は、リアリティモニタリング法を用いても虚記憶の生起を抑制することができなかつたと考えられるのである。この結果は、田中（2004）においても同様の結果が示されている。

そこで本研究では、個別性の異なる2種類のスキーマに基づく内的記憶の質的特徴の違いについて、より詳しく検討を加えることを目的とした。具体的には、実験現象学的アプローチとして用いられているMCQを用いて、個別性の異なるスキーマに基づく内的記憶が持つ質的特徴を比較検討した。これまでMCQは、主に外的記憶と内的記憶の質的特徴の比較に用いられてきたが、ここでは、推測の基となるスキーマが異なる内的記憶が持つ質的特徴の比較に用いられた。

本研究の仮説は以下のとおりである。先行研究によると、個別性の高いスキーマは個別性の低いスキーマより具体的であるため、そこからもたらされる内的に得られた記憶の知覚的特徴は詳細で鮮明であると考えられる。つまり、個別性の高いスキーマに基づいて推測される場面（内的記憶）は、実際に提示された場面（外的記憶）のように知覚的詳細や文脈情報を豊富に持つと考えられる。一方、個別性の低いスキーマに基づいて推測される場面においては、そのような特徴は示されないと考えられる。したがって、MCQ評定値は、感覚・知覚情報に関する項目において、個別性の高いスキーマに基づいて推測される場面の方が個別性の低いスキーマに基づいて推測される場面よ

りも高く評定がなされると予想される。

## 方法

### 被験者

K女子大学生41名が実験に参加した。そのうち分析対象となったのは、34名（平均年齢21.2歳）であった。ビデオの内容の読み取りが不十分な者や明らかに誤った読み取りをしている7名は分析より除外された。実験に参加した被験者は、刺激となるビデオクリップの撮影場所であるK女子大学に入学後半年以上経過していることから、K女子大学構内をよく知っており、個性性の高いスキーマを持つと想定された。

### 刺激材料および装置

#### (1) ビデオクリップ

ビデオクリップは田中ら(2005)で用いられたビデオクリップに新たに7場面を追加し、再編集したものが用いられた。したがって、再編集されたビデオクリップは18の場面からなり、時間は全体で3分27秒であった。映像はカラーで無音声であった。ビデオの内容は“図書館で勉強していた2人のうち1人が立ち上がる。図書館から出て、エレベーターの前まで行く。廊下を歩く。自動販売機の前でコップを落とす。トイレの方向に向かう。購買で商品を見る。喫茶室で携帯電話からメールを送る。門を出て車のところまで歩いてくるが、車の前で鍵がないことに気付く。走って戻る。図書館で一緒だった友人と建物から出て別れる。再び車の前まで歩き、鍵を開け、車に乗り込む。”というものであった（ビデオクリップの詳細については、田中（2004）を参照のこと）。このビデオクリップに含まれる特殊な建物の構造やそれに伴うスキーマを個性性の高いスキーマとした。

#### (2) 装置

刺激となるビデオクリップの提示は、Victor製ビデオデッキとSONY製テレビを用いた。画面の

大きさは22cm×30cmであった。

#### (3) MCQ (Memory Characteristic Questionnaire)

Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988)のMCQに含まれる項目より11項目が選択された。選択されたのは、明快さ (Clarity: 1ぼんやりしている～7きわめてはっきりしている)、色彩 (Color: 1白黒である～7完全なカラーである)、視覚的詳細 (Visual detail: 1視覚的に細かい部分はほとんどない～7たくさんある)、鮮明さ (Vividness: 1ぼんやりしている～7きわめてはっきりしている)、出来事の詳細 (event details: 1場面の記憶は大雑把である～7きわめて詳細である)、複雑さ (Complexity: 1単純である～7複雑である)、現実感 (Realism: 1奇妙である～7現実的である)、場所の記憶 (Location: 1場所の記憶は曖昧である～7はっきりしている)、状況 (Setting: 1状況全体は珍しい～7ありふれている)、事物の配置 (Objects spatial: 1事物の位置関係は曖昧である～7はっきりしている)、人物の配置 (People spatial: 1人物の位置関係は曖昧である～7はっきりしている)の11項目である。これらはすべて7件法で評定された。

刺激として提示されたビデオクリップの中から4場面が評定の対象として設定された。これらは、実際にビデオクリップに提示されている場面（提示場面）で、「図書館で友人と別れる」「廊下を歩く」「建物から出てくる」「車の鍵を開ける」の4場面であった。

また、ビデオクリップには提示されていない場面（推測場面）が6場面設定された。6場面のうち、3場面は、個性性の高いスキーマに基づいて推測される場面（高スキーマ推測場面）である。これは、「エレベーターに乗る」「トイレに入る」「食物を買う」の3場面であった。これらの場面は、図書館のある建物に関する個性性の高いスキーマが利用されやすい場面であると考えられる。

しかし提示されたビデオクリップの中には、これらの場面は映し出されていない。残りの3場面は、個別性の低いスキーマに基づいて推測される場面（低スキーマ推測場面）である。これは「携帯電話を開く」「車の鍵を見つける」「車を発進させる」の3場面であった。これらの場面についても、提示されたビデオクリップの中には映し出されていない。また、これらの場面は個別性の高いスキーマが適用されない場面であるため、個別性の低いスキーマに基づいた推測がなされると考えられる。

これら10場面はそれぞれMCQの11の評定項目とともに用紙に印刷され、ビデオのストーリーに沿った順番で綴じられた状態で被験者に配られた。

#### 手続き

本実験は田中（2004）の一環として行われたものである。しかし、本研究で分析するデータは異なっている。実験は個別に行われた。

##### (1) 刺激提示

実験者は被験者に、ビデオクリップの内容の読み取りを調べる実験であると教示し、ビデオクリップを提示した。後に記憶テストを行うことは予告しなかった。したがって偶発学習事態であった。ビデオ終了後、被験者に口頭での再生を求めた。これはビデオの内容の読み取りについて確認をするためであった。

##### (2) MCQ

刺激提示日から1週間後に、被験者は刺激提示を受けた部屋とは別の個室に呼ばれた。後日課題を行うということは知らされていない。

被験者は、MCQの評定用紙を配られ、評定対象となっているそれぞれの場面について再認判断を行った。対象となった場面を全く思い出せない場合は、MCQの評定は行わず、次の場面の再認判断へ進んだ。少しでもその場面を思い出せた被

験者は、その場面の記憶の特徴についてMCQの11項目の評定を行った。評定は被験者個人のペースで行われた。評定時間は15～20分程度であった。なお、刺激提示からMCQ質問紙に関する教示まですべて同じ実験者によって行われた。

#### 分析方法

まず3種類の場面条件（提示場面・高スキーマ推測場面・低スキーマ推測場面）ごとに、再認された場面数をカウントし、平均値を求めた。その際、提示場面に関しては、「廊下を歩く」場面ほとんど再認が示されなかったため分析より除外した。したがって、提示場面の分析対象となったのは3場面であった。高スキーマ推測場面と低スキーマ推測場面はそれぞれ3場面が設定されていることから、分析の対象となった場面数は合計9場面であった。提示場面は、提示されたビデオクリップの中に含まれる場面であるため、被験者にとって“実際に見た”外的記憶であると考えられる。したがって、提示場面に関して再認がなされた場合、それらは正再認となる。一方、高スキーマ推測場面と低スキーマ推測場面は、実際にビデオクリップの中には含まれない場面であったため、推測やイメージなどの内的記憶であると考えられる。したがって、両推測場面に関して再認がなされた場合、それらは虚再認となる。また、2つの推測場面は、その基となったスキーマの個性性が異なっていた。そのため、2つの推測場面で生じた虚再生は、個性性の異なるスキーマに基づいて生じたものであると考えられる。これら3種類の場面条件における平均再認数を検証した。

次に3種類の場面条件におけるMCQの評定値について分析を試みた。MCQの評定対象となった9場面すべてについて、提示された場面であると再認した被験者は、34名のうち9名であった。したがって、この9名の評定値を分析対象とした。11の評定項目それぞれにおいて、場面条件ごとに

評定値の平均を算出し、その後の検討を試みた。

**結果**

**場面の再認**

3種類の場面条件（提示場面・高スキーマ推測場面・低スキーマ推測場面）における再認数を検討するため、再認された場面数をカウントし、平均値を求めた。各場面条件にはそれぞれ3場面が設定されており、場面条件ごとの平均再認数は、提示場面が2.91（SD=.28）、高スキーマ推測場面が2.47（SD=.65）、低スキーマ推測場面が2.17（SD=.78）であった（Figure 1）。

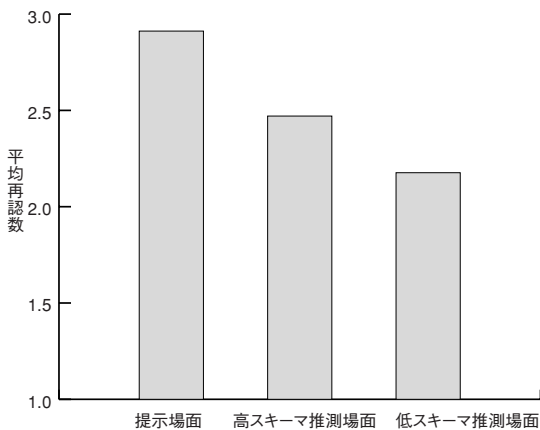


Figure 1 場面条件による平均再認数

1 要因の分散分析を行ったところ、主効果が有意であった（F（2,66）=13.55, p<.01）。LSD法を用いた多重比較の結果、提示場面の再認数は、2種類の推測場面の再認数よりも有意に大きかった。さらに、高スキーマ推測場面における再認数は、低スキーマ推測場面の再認数よりも大きかった（MSe=0.34, p<.05）。

**MCQ評定値**

次に、3種類の場面条件におけるMCQ評定値について分析を試みた。MCQ評定の対象となっ

た9場面すべてについて評定を行った被験者は、34名のうち9名であったため、この9名の評定値を分析対象とした。11の評定項目それぞれにおいて、場面条件ごとに評定値の平均値を算出した。場面条件における各評定項目の平均値をTable 1に示す。

Table1 場面条件によるMCQ評定項目の平均値 (SD)

MCQ評定項目	場面条件			分散分析
	提示場面	高スキーマ推測場面	低スキーマ推測場面	
明快さ	5.33(1.20)	5.00(1.01)	4.26(1.02)	+
色彩	5.15(1.04)	5.00(0.97)	4.30(1.05)	+
視覚的詳細	4.48(0.80)	3.78(0.86)	4.22(1.02)	
鮮明さ	4.81(1.06)	4.37(0.92)	3.78(1.21)	+
出来事の詳細	4.56(0.89)	3.93(0.64)	3.70(1.09)	
複雑さ	2.26(1.28)	2.52(1.18)	2.52(1.09)	
現実感	6.48(0.42)	6.70(0.40)	6.07(1.06)	+
場所の記憶	6.44(0.59)	5.93(1.20)	5.63(1.06)	+
状況	6.44(0.72)	6.59(0.52)	5.78(1.18)	+
事物の配置	6.26(1.00)	5.81(1.20)	5.22(1.41)	
人物の配置	5.67(0.96)	5.81(1.23)	5.44(1.15)	

+ : p<.10

評定項目ごとに1 要因分散分析を行ったところ、明快さ、色彩、鮮明さ、現実感、場所の記憶、状況の6項目に有意傾向が見られた（明快さ；F（2,16）=3.07, p<.10、色彩；F（2,16）=2.88, p<.10、鮮明さ；F（2,16）=2.71, p<.10、現実感；F（2,16）=2.78, p<.10、場所の記憶；F（2,16）=2.88, p<.10、状況；F（2,16）=2.88）。つまり、これら6項目については3種類の場面条件のいずれかの評定値に差がある傾向が示された。一方、視覚的詳細、出来事の詳細、複雑さ、事物の配置、人物の配置の5項目に関しては、有意な差は認められなかった。

試みに、有意傾向が示された6項目についてLSD法を用いた多重比較を行ったところ、明快さ、色彩、鮮明さ、場所の記憶の4項目については、提示場面と低スキーマ推測場面との間に有意な差

が見られた（明快さ：MSe=0.89,  $p<.05$ 、色彩：MSe=0.65,  $p<.05$ 、鮮明さ：MSe=0.90,  $p<.05$ 、場所の記憶：MSe=0.53,  $p<.05$ ）。つまり、提示場面の方が低スキーマ推測場面より明快さ、色彩、鮮明さ、場所の記憶において評定値が高い傾向が示された。また、現実感と状況の2項目については、高スキーマ推測場面と低スキーマ推測場面との間に有意な差が見られた（現実感：MSe=0.33,  $p<.05$ 、状況：MSe=0.59,  $p<.05$ ）。つまり、高スキーマ推測場面の方が低スキーマ推測場面よりも現実感と状況の2項目の評定値が高い傾向が示された。

### 考察

先行研究において、個性性の高いスキーマに基づく虚再生はリアリティモニタリングが困難になることが示された。個性性の高いスキーマは具体的で詳細であるため、そこからもたらされる内的記憶の知覚的情報は詳細で鮮明となる。したがって、リアリティモニタリングが困難となり、虚再生が生じやすくなると説明がなされている（田中ら、2005）。

本研究は個性性の高いスキーマと個性性の低いスキーマに基づく内的記憶を持つ質的特徴の違いについてMCQを用いて検討を試みた。これは、個性性の高いスキーマに基づく内的記憶は個性性の低いスキーマに基づく内的記憶より詳細で鮮明な知覚的情報を持つのかについて、より直接的に検証するためである。

まず、各場面条件の再認について検討を試みたところ、ビデオクリップで実際に提示された場面は、実際には提示されていない2種類の推測場面よりもより多くの再認がなされた。注目すべきは、2種類の推測場面において、高スキーマ推測場面は、低スキーマ推測場面よりも、より再認されやすいという結果である。2種類の推測場面はとも

にビデオクリップには提示されていない場面であり、これらの場面についての再認は、実際には見えていない事柄を“見た”とする虚再認であると考えられる。つまり、個性性の高いスキーマが適用される場面での推測やイメージした事柄（内的記憶）は、“実際に見た”外的記憶であると虚再認されやすかったと言える。

次に、MCQの評定値について分析を試みたところ、11項目のうち、明快さ、色彩、鮮明さ、現実感、場所の記憶、状況の6項目について場面条件における有意な傾向が示された。一方、視覚の詳細、出来事の詳細、複雑さ、物体の配置、人物の配置に関しては、場面条件における差は認められなかった。

試みに、有意傾向が示された6項目について下位検定を行ったところ、現実感と状況の2項目について、高スキーマ推測場面の方が低スキーマ推測場面よりも、評定値が高い傾向が示された。これは、同じ内的記憶であっても、個性性の高いスキーマに基づいた内的記憶は現実感が高く、ありふれている状況であると評定される傾向にあることを示している。現実感と状況はともに外的記憶が豊富に持つとされる質的特徴である（Johnson, Foley, Suengas, Raye, 1988）。したがって、個性性の高いスキーマに基づく内的記憶の方が個性性の低いスキーマに基づく内的記憶よりも外的記憶に近い質的特徴を持つ可能性が示唆されたと考えられる。

また、本研究で設定している個性性の高いスキーマは、ビデオクリップに含まれる特殊な建物の構造やそれに伴うスキーマであったことも、上記の結果に影響を与えた可能性があると思われる。本研究において個性性の高いスキーマを持つと設定された被験者は、ビデオクリップの場面である大学に所属し、日々の学生生活を送る中で個性性の高いスキーマを獲得してきたと考えられる。し



たがって、その場面は被験者らにとって非常に現実感があり、ありふれた状況であると感じられたと思われる。このような高スキーマ推測場面における内的記憶の特徴は、個別性の高いスキーマに基づく虚再認や虚再生を考える上で有益な情報を提供していると思われる。

一方、明快さ、色彩、鮮明さ、場所の記憶の4項目については、提示場面の方が低スキーマ推測場面よりも評定値が高くなる傾向が示された。つまり、実際に提示された場面（外的記憶）の方が低スキーマ推測場面（内的記憶）より明快な質的特徴を持ち、色彩情報が豊かで、鮮明さも高く、場所に関する記憶も豊かである可能性が示唆されていると考えられる。これら4項目は、感覚・知覚情報に含まれる質的特徴であり、内的記憶よりも外的記憶において豊富であるとされている特徴である (Johnosn, Foley, Suengas, Raye, 1988)。したがって、この結果は、Johnson & Raye (1981)の枠組みを支持する傾向にあると考えられる。しかし、高スキーマ推測場面については、こちらも内的記憶であるにも関わらず、外的記憶である提示場面との間に評定値の差は示されなかった。高スキーマ推測場面における4項目の評定値はいずれも、提示場面と低スキーマ推測場面の評定値の中間に位置し、提示場面と低スキーマ推測場面のどちらの間にも明確な違いが示されていない。したがって、本研究の結果からは、個別性の高いスキーマに基づく内的記憶の方が個別性の低いスキーマに基づく内的記憶よりも感覚・知覚情報を豊富に持つとは結論づけられない。しかし、高スキーマ推測場面における評定値と提示場面における評定値との間に差が示されなかったという結果は、リアリティモニタリングの困難さを説明するための間接的な手がかりとなる可能性がある。

最後に、本研究で分析、考察されたMCQ評定値の場面条件間の差はいずれも有意傾向にとどま

っている。ここでは、今後の研究の手がかりを得るため、下位検定を試みたが、それらの結果を確認する研究が必要であると思われる。また、分析の対象となった被験者数が少ないことが、結果の不安定さにつながっている点は否めない。今後被験者数を増やし、より安定した結果を得て、個別性の異なるスキーマに基づく内的記憶の質的特徴について、さらに詳細な検証を試みる必要があるだろう。それらは今後の課題である。

#### 引用文献

- Johnoson, M. K. 1988 Reality monitoring: An experimental phenomenological approach. *Journal of Experimental Psychology: General* 117, No.4, 390-394.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. 1988 Phenomenal characteristics of memories perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General* 117, No.4, 371-376.
- Johnson, M. K., Hashtoroudi, S., & Lindsay, D. S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- Johnson, M. K., & Raye, C. L. 1981 Reality monitoring. *Psychological Review*, 88, 67-85.
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Wang, A. Y., & Foley, M. A. 1981. Cognitive operations and decision bias in reality monitoring. *American journal of psychology* March 94, No.1, 37-64.
- Johnson, M. K., Raye, C. L., Wang, A. Y., & Taylor, T.H.1979 Fact and Fantasy: The roles of accuracy and variability in confusing imaginations with perceptual experiences. *Journal of Experimental Psychology: Human learning and memory* 5, No.3, 229-240.
- 金城光 2001ソース・モニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望 *心理学研究*72, 134-150.
- 田中晶子2004 スキーマの個別性が虚再生に及ぼす影響－ビデオクリップを用いた検討－*四天王寺国際仏教大学紀要短期大学部* 46, 1-8.
- 田中晶子・広瀬雄彦・高岡昌子 2005 スキーマの個別性

スキーマの個性性がリアリティモニタリングに及ぼす影響

が虚再生に及ぼす影響—目撃証言の観点から— 心理学研究 75, 471-478.

#### 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました京都女子大学文学部、藤井淳子さんに感謝いたします。